

2019. 5. 2

畑 啓之

萬葉集研究に見た、その道のプロの凄さ

「令和」という元号は萬葉集の「梅花歌世二首扨序」より名付けられた。古典にはなじみのない私であるが、その出所がどのようなものであるか、興味本位で覗いてみた。読み上げられるとその歌の響きは趣があって良いものであるが、実際の歌は漢字の連続である。古の日本語の音に、その音に合うように中国からもたらされた漢字の音をそのまま当て込んだためである。その結果として、同じ音であっても複数の漢字が当てられている。とても素人には手が出せるものではない、と感じた。

万葉集 (Wikipedia) 奈良時代末期に成立したとみられる日本に現存する最古の和歌集である。万葉集の和歌はすべて漢字(万葉仮名を含め)で書かれている。天皇、貴族から下級官人、防人、大道芸人、農民、東国民謡(東歌)などさまざまな幅広い身分の人々が詠んだ歌4,500首以上も集めたもので(うち作者不詳の和歌が2,100首以上ある)、759年(天平宝字3年)までの約130年間の歌が全20巻に分類収録されている。

4500首近くの歌ならば現在の書籍であれば一冊に収まる。

しかし、その解説となるとそのボリュームは一挙に20倍以上へと膨れ上がる。右に示した萬葉集註釈(巻第1~20)がそれであり、20巻に分かれている萬葉集の、それぞれの1巻に分厚い註釈が一冊割り当てられている。

沢瀉久孝 (コトバンク)

国文学者・文学博士。三重県生。京大教授。大著『万葉集註釈』

(二十巻)完成に対し、朝日賞が授与される。武田祐吉と並び現代の代表的な万葉学者。後進の育成にも努め、佐伯梅友・池上禎造・小島憲之らの門下を輩出する。昭和43年(1968)歿、78才。

その第一巻に実に感動的な「はしがき」がある。まず「自分のために」まとめる。これはプロとしての鏡である。まとめるためにはある極みに達する必要がある。

次ページ以降に「はしがき」、そして「萬葉集註釈 巻第五 梅花歌世二首扨序(部分)」を添付した。

沢瀉 久孝 著書

萬葉集註釋 〈巻第1~20〉

萬葉集註釋 〈別巻 本文篇〉

萬葉集註釋 〈別巻 索引篇〉

万葉古径 〈1~3〉

万葉集大成(全19巻)

校註万葉集

校註万葉集新選

校註日本文芸新篇万葉集抄

はしがき

萬葉集といふものは、だいたいわかつてゐて、ところどころにわからないところがある、さういふ風に考へてをられる方が多いやうな氣がする。そしてそのむつかしいところをより出して、あれはどう訓みますか、ここはかう解くべきではないでせうか、などと聞かれる。しかし私にはそんなまやさしいものではない。私が萬葉集を讀みはじめてから五十年に近い歳月がたつ。大學で萬葉を講じそめてからでも、卅餘年の月日が流れてゐる。それにもかかはらずわからないところだらけである。一寸した歌一つ引用しようとしても参考書が必要である。手許にあるあの書この書をくりひろげる。一つでは足らず、二つ、三つ、四つといくつもの書を引出さねばならぬ。一書を開くと簡明に解説せられてゐるやうだが、よく考へると一つはつきりしない。別の一書を見るとまた違った説が出てゐる。そこでまた別の一書を繙くと、かういふ説もあるがそれには従ひ難い、とある。なぜ従ひ難いか書いてない。結局自分で考へるより仕方が無いといふ事になる。

又出典のあるらしい語句があるので一書を開くと「史記に曰くしかじか」とある。史記のどこにあるのかと思つて又別の本を見るが、そこにも「史記にしかじか」とあるのみである。どの本もどの本も同様である。仕方が無いので自分で司馬遷著はすところの史記百卅篇を片っぱしから探してゆくが、さういふ文句は見つからない。まづかういふ有様である。もつと手つ取りばやく、しかも得心のゆくやうな参考書がないものかと思ふ。さういふ事を考へながら私はこの注釋書を書いた。この注釋書は何よりもまづ私自身の爲なのである。あちらの書物を開いたりこちらの書物を開いたりしないで、これさへあれば一應事が足りるやうなものを作つておきたいといふのが私の願ひである。

今迄誰も訓めなかつた歌を訓めるやうにする事もけつこうな事だが、それよりも、わかりきつた事だと思つてた事が存外わかつてゐなかつたり、もうこれはこれに違ひないと思つてた事がさうでなかつたりする事が存外多いので、まづさういふ點をだめを押してはつきりさせるといふ事が一層大切な事ではないかと思ふ。僅か五句卅一音内外の作品の一語一句でも訓み方に異説のある事は重大事である。それをよい加減にしておいて「鑑賞」「批評」などをやる事は不可解な事だと私は昔から思つてゐた。しかも一つの句にAと訓む説とBと訓む説とがあると知りながら、ついでちらともきめずに、——きめずにといふより、きめられない事のやうに思はれ、しひてきめようとすればぎごちない理窟だけを述べるやうな事になりさうでそのまゝにして今日に至つたが、何十年同じ道を辿つてみると、なぜAは穩かでないか、Bにもどういふところに無理があるか、何が故にCでなければならぬか、といふやうな事が存外すらりとわかるやうな氣になつた。自身の爲といふのが第一であつたとしても、いよいよ公刊するとなると、初學の方や門外の方にも、自分の至り得たところをやゝくはしく述べておく事も参考になるのではないかと考へた。その道の人には饒舌だと思はれるところが生じたと思ふ。又初學の人にはそこまでの論議は不必要だと思はれる考説も加へた。はじめ卷一の原稿二百字千四百枚であつたも

のが公刊ときめて改稿したら千七百枚になつたのも右のやうな事情によるのである。注釋書といふものは論文や小説のやうにはじめからしまひまで讀まねばならぬものではない。興味の無いところやわかりきつたと思はれるところははずんずん飛ばして讀んでいただきたい。

千何百年の間疑問のまゝで來た語句が今日忽ち解決がつくといふはずはない。だから「姑くこの按に従ふ」とか「後考を俟つ」とかいふ事も屢起るのは當然である。しかし本書に於いては私は「姑く——従ふ」といふ言葉の使用を最少限度にとどめたつもりである。萬葉集の注釋の如きは、もはや今迄のやうに一人の筆によるべきものではなく、協同著作によるべきではないかと一時考へた事もあつた。しかし私はこの注釋を書き進めて來てこれだよいのだと思ふやうになつた。もし私がこの書を幾人の人と共に書いたならば、かういふものは書けなかつたと思ふ。至る處で私は心にもない妥協をしただらうと思ふ。學問の世界に於いて妥協程意味の無い事はない。私の解釋にはいろいろ間違ひがあるだらう。——しかし妥協するよりは意義があると思つてゐる。

先年私は、「萬葉集は大伴家持が作歌勉強の爲の歌ノートである」と書いた事があるが、今の人にとつても萬葉集はそれを讀む人々のそのひとりひとりの心の糧である。従つてそれを讀む人々ひとりひとりに自分自身の注釋があつてよい。注釋の究極所はさういふものだと思ふ。さういふ意味で、みづから執筆の暇をもたれぬ方々が本書を底本としてその上に更に大いに朱筆を加へられ、みづからの注釋書とせられたならば、私の本懐之に過ぎるものはないのである。その爲に私は私の結論を出来るだけはつきり書くと共に、私と見を異にする諸説を出来るだけ詳しく紹介したつもりである。小著の不備を是正する爲に十分それらを活用していただきたいと思ふ。原文記載のあたりに餘白を多くしたのも書人の事を考へた故である。

今日定説となつてゐるやうな説もその説があらはれる迄に多くの異説があつたかは、たとへば本書には一々引用しなかつたが持統天皇の御製「春過ぎて夏來るらし」(三六)の古注を一覽されただけでも認められるところであらうと思ふ。先人の業績は重んずべく敬ふべく、尊むべく崇むべきものである。私は自分をはじめ考へ得たと思つた説も既に先人にその説があつたと氣づいた時はその先人の説としてあげたつもりである。幸に紙數の制限も無いまゝに尊重すべき古人の言はその言葉のまゝに引用した。現代の諸家の説も引用すべきものはつとめて引用した。もし見落したものは十分の御教示を仰ぎたいと思ふ。本書は今後十年に亘る刊行であるから誤謬と認むべきところは次々と訂正してゆきたいと思ふ。

本書の公刊はなほ數年後にと考へてゐたのであるが、昨年夏正宗敦夫翁が來訪された折その懇篤なる徳憑に遂に動かされたもので、私にこの決心を促された同氏の盛情を今にして深く感謝する。

先人諸先達の業績に負ふところはもとより、本書出版にあたりさまざまの方々より與へられた芳情に對しては一々ここに記し難く、たゞ特に橋本四郎君に最後の原稿整理の助力を得た事と中央公論社出版部の瀧澤博夫氏に編輯製本に至る一切の配慮を煩はした事とを記して厚く謝意を表する。

昭和卅二年秋九月

澤 瀧 久 孝

梅花歌卅二首 扞序 より

伊比都夏等 許能久斯美多麻 志可志家良斯母 云ひ給げと この奇御魂 歌かしけらしも

九六

【口語】天地と共に久しくつまでも語りつげと、このふしぎな神靈は御魂にたつたのであらうよ。【訓釋】天地と共に久しく「天地存共」(二二五、四三三)の如く、「と共」(二二五)の如く、「と共」(二二五)とあるの少し異様に感ぜられる。「天地存共」(二二五)の如く、「と共」(二二五)ともあらうやうに、「と共」(二二五)の如く「と共」の意となるやうであるが、「況んや」(二二五)などの例を見ると「と共」(二二五)とあるのと殆ど同じやうに用いられたので、「と共」の方が古語に用ゐる方が目立つべきではなからうか。歌かしけらしも「この「歌かし」をおぼろげに、といふやうな意味に多く用ゐられてゐるが、「歌かし」は「神古の御手」(五三〇)、「天竺之」(四三三)の如く、領有する意あるからこれを他動詞と見るのはをかし、既に右と云はずに「奇御魂」と云つてあるのでその御魂を主として、御魂にたつたので、といふ云ひ方をしたものと解すべきであらう。「も」は詠歌の助詞。

右事傳言那珂郡伊知郷袋島人建部牛麻呂是也

「那珂郡」は今、新潟市の東南、佐渡郡の西部、引越廿九年に郡田、御笠と合してもので、新刊川の源流である。伊知は地名沙に海野郷の一名であらうと地名辭書にある。「袋島」(二二五)の字、廿葉略類聚抄(二二五)またその他「袋」とある。類聚名義抄(上)に「袋」(二二五)とある。「袋」の略字として用ゐるものと思はれる。この名は今も新潟市の南部に残つて

をり、筑前國で博多縣の西葉島郷のあるあたりである。應長がその地の建部牛麻呂といふ人から聞いたまゝ「御魂之中」とも「冠御魂家中」とも注して、しかも多少の増補を加へてこの作を成したと思はれる所々に述べた如くである。

梅花歌卅二首 扞序

次の序によつて明らかなやうに、天平二年正月十二日に大宰府大伴旅人の邸で梅花の宴が催された時の作である。梅花の作は既に卷二に五三、卷四に三三見えたが、作歌年月から云へば、その以前に出た大伴旅人の作(三五三)とこの作とが前後するものと思はれ、他はむしろ後の作と考へてよいであらう。今集中の梅花を採み入れた作の数をみると、

Table with 2 columns: 歌數, 冊數. 0 4 3 7 2 0 23 0 30 0 6 1 8 4 118

の如く、數に於いては植物としては既に次々多數であるが、卷一、二の古の巻を卷十一乃至十六の古歌論を民部を含む巻には一首もないといふ事は、この植物が舶来のものであつて、まだ十分國民に定まなかつた事を示すものである。その梅がまづ淡路に近い大宰府に移置せられ、この一冊の作となつた事は當然であり、卷十七にある六百の如きもこの折の追憶の作である事が注意せられる。

天平二年正月十三日奉詔 帥老之宅中宴會也 于時 會を申ぶ、時に初春令月氣淑く風和き梅

卷第五 八二

九七

初春令月氣淑風和梅枝鏡 前之粉園薫風後之香 加 以曙嶺移雲松掛羅面傾蓋 夕袖結露鳥封雲而迷林 庭舞新蝶空歸故扇 於是 蓋天坐地便藤飛翫 忘旨 一室之裏開於烟霞之外淡 然自放快然自足 若非翰 苑何以摠情 詩紀落梅之 篇 古今夫何異矣 宜賦 園梅聊成短詠 (七)

は鏡前の粉を開き、園は風後の香を薫らす。加、以、曙の嶺に雲移り、松は羅を掛けて、蓋を傾く。夕の袖に露結び、鳥雲に封められて林に迷ふ。庭には舞ふ新しき蝶、空には歸る故つ扇。ここに天を蓋にし、地を坐にし、藤を促け、翫を飛ばす。言を一室のうち、に忘れ、於に煙霞の外に開き、淡然として自ら放ち、快然として自ら足る。若し翰苑にあらざるは何を以てか情を摠べむ。詩に落梅の篇を紀す。古今それ何ぞ異ならむ。宜しく園梅を賦して聊か短詠を成すべし。

九八

の歌には雲が移りゆき、松は薄霧をかけてきぬがさを傾けてゐる。夕方の山の洞には霧が立ちこめ、その霧のちから鏡にとちこめられて、鳥は林に迷うてゐる。庭には新しき蝶が舞ひ、空には古なじみの鳥が歸つてゆく。そこで天を衣蓋にし、蓋を傾け、夕の袖に露を結び、鳥雲に封められて林に迷ふ。庭には舞ふ新しき蝶、空には歸る故つ扇。ここに天を蓋にし、地を坐にし、藤を促け、翫を飛ばす。言を一室のうち、に忘れ、於に煙霞の外に開き、淡然として自ら放ち、快然として自ら足る。若し翰苑にあらざるは何を以てか情を摠べむ。詩に落梅の篇を紀す。古今それ何ぞ異ならむ。宜しく園梅を賦して聊か短詠を成すべし。

【口語】天平二年正月十三日、大宰の帥の宅に集まつて宴會を開いた。折しも初春のよき月であり、氣は清淑、風はやほらかに、梅は主人が鏡前の紅ひのやうに開き、園にはほひ雲の香のやうにほらうてゐる。そればかりではない。明け方の歌には雲が移りゆき、松は薄霧をかけてきぬがさを傾けてゐる。夕方の山の洞には霧が立ちこめ、その霧のちから鏡にとちこめられて、鳥は林に迷うてゐる。庭には新しき蝶が舞ひ、空には古なじみの鳥が歸つてゆく。そこで天を衣蓋にし、蓋を傾け、夕の袖に露を結び、鳥雲に封められて林に迷ふ。庭には舞ふ新しき蝶、空には歸る故つ扇。ここに天を蓋にし、地を坐にし、藤を促け、翫を飛ばす。言を一室のうち、に忘れ、於に煙霞の外に開き、淡然として自ら放ち、快然として自ら足る。若し翰苑にあらざるは何を以てか情を摠べむ。詩に落梅の篇を紀す。古今それ何ぞ異ならむ。宜しく園梅を賦して聊か短詠を成すべし。

卷第五 八二

九九

